

つ故国へ帰れなかつた多くの同胞に心から冥福を祈ると共に、元気に活躍されている方々の益々の御健斗と御多幸を祈念いたします。

## 満州からシベリアへ

島根県 塚田信雄

大沢大尉を長とする千名の作業大隊が編成され、昭和二十年九月中旬北孫呉を出発した。入ソ後は次から次へとコルホーズ、またはソホーズの馬鈴薯の掘取りをしながら前進する。食糧の支給はなく、わずかの岩塩で主食は辛だけの生活を送り、疲れ果てた体で十月中旬炭鉱の街ライチハに着く。

そこで、作業大隊は編成替えて二つに分けられ、半分の五百名は（アラチカ地区）へ先に出発して行った。残りの五百名の松沢隊は、露店掘りの炭坑を右に見ながらライチハの街を通り過ぎて駅から貨車に乗せられる。

長い道中を労働しながら歩かせられて、ようやく汽車に乗ることができた。そして、シベリア本線でウラジオ経由でダモイするかと思うとうれしくなり、みんなも急に元気になる。

ところが何時間も走らぬうちに降ろされたのである。そこはシベリア本線のブレーヤでライチハは支線であった。私たちは本線に乗りかえるためにどこかで待機するであろうと思つて歩くが、先頭はとまらずにどこまでも歩かせられる。そのうち、右手に五百メートル以上の大きい河が見え、引き込み線が道路と並行して走っており、線路は何年も使用した跡はなく、枕木は腐りレールは赤錆になっていた。

ブレーヤの駅から十キロ以上歩いたのであろうか、間もなく左手に小高い崩れかけた山があらわれ、採石場らしきところが見えるではないか、ここへ来てやっと気がつき「コリヤ大変だ。石切り場で働かせるために連れてきたのだ」と全員愕然とした。

何年働かされるか、ついに帰国する夢は消えて、一生涯強制労働をさせられるかもしれないと、暗澹たる

気持ちになる。

### 川辺の収容所

間もなく大隊は数棟の大きい建物が並んでおるブレーヤ湖畔に着く。廃屋同様で窓ガラスは壊れ、人の住める状態ではない。いずれにしても、ここが我々の落ち着くラーゲルだったのである。とにかく着いた夜はいかようにすることもならず、板の間にゴロ寝となる。孫兵を出て二十日以上になるが屋内で休むことなく、野宿よりはまして毛布を頭からかぶり第一夜を過ごす。

季節は既に初冬期に入っており肌寒くて、故郷の父母、弟妹のことが臉に浮かびなかなか寝つかれなかった。翌日から早速、自分たちの入るラーゲルの柵づくりを自分たちでやる羽目になる。現場にはロシア人も十数名おり、ともに仕事をしたが、囚人あがりらしく、日本人に好意を持っているように見えた。

作業は先ず周囲に高さ三〜四メートルの丸太を二メートル間隔に建立し、さらに内と外に一・五メートルくらいの丸太を掘り立てて、有刺鉄線を筋違いに張

りめぐらす。そして、本柵と内外の柵の距離が三〜四メートルあるので、その間に砂を敷き、入れば足跡がつくようになっており犬猫以外の出入りは不可能である。

正門にある守衛所には常時二〜三名の衛兵が勤務しており、また三隅の望楼にも昼夜交替でコンボイが自動短銃を持って監視し、夜間近づく者あらば投光器により照明し、威嚇射撃をしてくる。しかし、このように厳重な警備をしているのは日本兵の逃亡を防ぐと同時に、物資不足のソ連では外部からのコン泥の侵入を防止する目的もあつたようだ。

柵つくりと並行して建物の設備も次第に整えられて、壊れた箇所は補修され、だんだん環境もよくなった。宿舎も日本軍の兵舎のように二段ベッドになり、敷布団が運ばれたのでよく見ると関東軍の物である。孫兵で使役のとき軍が備蓄した一切の物資（食糧品、生活用品）を残らず貨車積されていたが、当初から捕虜用に計画的に運送したものらしい。

だから、スターリンが日本兵を帰国させる意志は全

くなく、強制労働させるため連行したものとわかったが、今さら仕方がない。ラーゲルの片隅に一挙に百名以上入れる仕切りのない大型便所ができた。その一部に個室便所があり、収容所長をはじめ将校連中が使用していた。便槽は大きく深いのはじめのうちは弾薬投下してもおつりはなかったが、溜ってくるると芝草や葉つきの枝を投げ込んで防止策をとった。冬期間は凍結して山が高くなるので、ボールで突きくずし、ザル（柳条製）に入れて持ち出すのも作業の一つだ。

そのうち医務室が開設されて、日本の軍医、衛生下士官、医師の免許のある兵隊各一名が勤務することになったが、責任者はあくまでソ連の女軍医である。毎月行われる健康診断で、彼女は尻の肉をツネって等級を定めていた。一―二級は所外の労働。三級は所内の軽作業、四級は栄養失調で休養となり、栄養食が与えられた。ロシア流の診察は、熱が三十八度以上ないとどんなに苦痛を訴えても絶対休ませてくれない。私も入ソして馬鈴薯掘りのお土産か、右手の薬指が次第に化膿し、診察を受けたところ、指疱瘡とのことで、約

百日は休務となり、みんなが羨ましがっていた。この指は半世紀近くなった今日でも、寒い日、外仕事をすると真っ先に痛み、とんだシベリア記念となる。

兵隊のなかに理髪職人がおり、床屋を開業し、ソ連人もよく利用していた。ラーゲル生活になってから捕虜用に定められた糧秣を支給するようになった。主食は黒パン（昼用三百グラム）雑穀類（米、高粱、大麦、小麦、蕎麦、黍、大豆、小豆、玉蜀黍等）は朝夕の食材料となり、品目は日によって変わってくる。

一日三食のスープ用としてキャベツ、白菜等の野菜類、馬鈴薯、人参等の根菜類、豚、緬羊、塩鯀等の魚肉類、調味料は大豆油、味噌、醤油、岩塩、砂糖等になっているが、すべてカロリー計算で量的に極めて少なく、仕方がないので全部ぶっこんで雑炊にするほかに方法がない。

それから、次に食事の分配が格別大変だ。まず黒パンは大きく一個四キロだから、天秤計りで等量を定め追加分配する方法で、腹にたまり歯ごたえのある皮の部分が多く当たれば誰も喜んでた。また、雑炊の場

合でもスープでも順番に列をつくって受け取るわけだが、皆前の方へいきたがらない。なぜかというところ、大釜でつくり上からすくってゆくと最初は水分ばかりで中身が少ないが、だんだん終わりに近づくと濃くなり、中身が多くなるからである。

人間はだれしも食生活に極端に不自由すると性格を一変させる。このころパンなどのコン泥がふえ、腹痛などで食わずにうっかり油断するといつの間にかなくなる。そこで調べてみると若い人より年配者で、地方で裕福な生活をしてきた階層が多かったようだ。

私たちは日常腹いっぱい食べていつも満腹感で生活していたので、このような境遇となり、常に空腹で毎日を通じてと格別郷愁に襲われる。ほとんど若い青年の集団であるのかかわらず、色気の話は全然なく、食い気一辺倒である。

例えば、餡をたっぷりつけたポタ餅とか、甘いゼンざいが一番目に話題となる。そして食べ物の話に花を咲かせ、喉を鳴らしツバを飲み込んで眠る毎晩であった。

シベリアの大地が凍りつき、ブレイヤ河が凍結し、宿泊施設の整備が完了したところから、いよいよ石切り作業が始まることになった。ラーゲルから一キロくらいのところには作業現場があり、中隊ごとに持場が定められ、ロシア人の現場監督が一人つき、中隊長は副監督というところだ。朝八時から夕五時まで、炎暑の日も酷寒の日も、日曜日以外はカンボーイつきで労働させられた。

石切りは岩石山を爆破し、大石はコンプレッサーで削岩機により穴をあけ、ダイナマイトを詰め込み、雷管を埋め、導火線により発破をかける。技術的な仕事は一切ソ連人がやり、我が方はシャベルかバールを使って崖から石を掘り出し大きい石はハンマで割る。石は小さきまま、大きいもので自分で動かせる程度。その石をターチカ（一輪車）に乗せて線路脇の置場へ運搬する。そこで運んだ石を立方メートルで計られるよう一メートルくらいの高さに積み上げる。それが労働の成果で、ノルマ（基準量）による遂行率が監督から我々に至るまでの賃金計算の基礎になった。

置場の石が貨車何輛分かたまると、無蓋車（八十トンまたは、三十トン車）が入る。積込みは、毎回時間がなく「ダワイダワイ（急げ急げ）」の連発でいつも追い立てられながら作業をしたものだ。

五く六人のソ連人労働者の中に六十歳ぐらいの老人大工がいた。道具は鋸と斧だけで切る、割る、削る、なんでも器用にやっていた。石を運ぶターチカは車輪だけは鉄製だが、そのほかは白樺の丸太とカラマツの厚板を組み合わせたつくりで、毎日重い石を乗せるとよく壊れる。時にはわざとやり、大工に修理を頼み、終わるまで時間稼ぎをした。

ある日、作業中突然「ギャーッ」という悲鳴が聞こえたので駆けつけてみると、兵隊が一人岩に挟まれたのである。ボールでこじ上げようとしてもなかなか動かない。ようやく近くの者が体を引つ張り出したがグツタリしてもものも言えない。すぐに急造担架で医務室へ運んだが、内臓破裂ということで息を引きとったそうだ。まことに痛ましい犠牲であり、一日千秋の思いで帰国を待ち、今日まで行動をとにしたのに、痛

恨の極みであった。

このように一連の石切り作業は重労働であると同時に、危険な仕事であり、おかげで以降、ソ連側も配慮するようになり事故もなくなった。

約一年半の石切り作業に別れを告げ、昭和二十二年春、炭坑の街で一万人以上収容の大規模ラーゲル、ライチハで我々を迎えてくれたのは「日本新聞」で指導された民主運動であり、赤旗と革命歌、労働歌の波であった。かつての将校は「特権階級、反動分子」として批判をうけ、別棟に住み労働させられる。

#### ブレーヤ慰霊訪問

平成四年七月三日、私は全抑協主催のシベリア慰霊訪問団（アムール班、青木団長他三十名）に参加し、ハバロフスク市とアムール州の各墓地を巡拝する機会を得た。チャータ列車（晩、ホテル代用）でボラゴエ、ペロゴルスクから廻り、午後四時ごろブレーヤ駅に着く。降り立ったところは思い出の場所であるが、残念ながら四十五年前のこととて記憶にない。

駅頭にはブレーヤの副郡長（村の助役担当）さんが

わざわざ出迎えてくれた。郡庁舎表敬訪問、役所の玄関に背の高い八十歳（実際は六十七歳）くらいの老人が待っていた。当時、彼は石切り場の作業監督をしていたらしい。我々は忘れていたが、懐かしそうに話しかけ、ロシア語は通じなかったが、こちらも感激し土産物を渡したら大変喜んでいた。

それから議長室で飲物の接待を受けて、関係者の案内で目的の墓地に向かう。現場は道のない山の上の白樺林の中で、六名の戦友が寂しく眠っており、私たちのはるかなる記憶は草地の感じであったが、長い歳月で雑木が生い茂り現況が変わっていた。

墓前で日本から持参したお供物と線香、ローソクをたくさん立てて、青木団長の追悼の言葉、全員が般若心経を誦経して個人墓にお参りする。大阪の辻上、西山さん兄妹は、伐採事故で父を失い、初めてお参りした感動で涙、また涙でいつまでも墓前に額づいていた。その後、四十五年前の石切り現場に行く。山は崩れ、草木は立ち、昔の姿はなかったが、当時の困難辛苦のことが眼前に浮かび感慨無量であった。

続いて、ラーゲルの跡地は廃土が山をなし以前と全く異なり昔日を思い出すことができなかったが、一角にどうしてかボツンと古びた建物が残っていた。案内人の古老の言葉によれば、これはラーゲル時代の日本兵の建てた漬物小屋だという。また、今なお倒壊しないのは、日本の建築様式で壁土を使用し堅固であり、風雨がないのもその理由らしく何枚も記念写真を撮影する。

変わらないのはブレーヤ河で静かに洋々と流れており、私たちは心残りながら当夜宿泊の列車ホテルへ引き揚げる。

善良で親切的ソ連人

今回の墓参で見たり聞いたりして記憶に残る出来事を紹介したい。

その一、ラーゲル時代、カントーラ（ソ連側の事務所）に美人の女事務員ナーヂヤ（二十二、三歳）がいた。背が高くスタイル満点、銀髪をなびかせてサツソウと歩く姿は憧れの的であった。彼女が私たちの訪問を知らずに遠くの農場にいたが、連絡を受け、晩に副

郡長さんに連れられてやってきた。昔の美人も既に六十七歳、ソ連人特有の肥満体となり、面影はなく、一時間くらい通訳を入れて談笑して帰っていった。

翌日、キウダ地区の墓参をすませ列車ホテルに帰ると、昨晚のナーヂヤさんが主人と孫娘を同行し、野菜を土産に待っていた。時間なくゆっくり語ることができなかったが、彼女の誠意に対しうれしくなり、それぞれ土産を渡し、記念写真を何枚もとり、帰国してから郵送を約束し、別れる。

その二、私たちシベリア墓参団の一行に大阪の辻上、西上兄妹が参加していた。お二人のお父さんは当時、ブレーヤ河の中の島で伐採作業中事故死している。たまたま作業班の班長だった福井の金元さんも参加しており、辻上兄妹が現場に行ってみたいとの切なる希望で、彼がソ連側と交渉し、夜三名の警官の案内で八時ころ出発した。

大陸の夏は白夜に近く、十時半ころまで明るいので大丈夫とのことだった。当時、伐採の時期は十二月ころで河も凍結しており、横断して作業に往復していた

が、今回は遠回りして陸路になるため勝手が違い、記憶をたどり相手に説明してもなかなかわからない。そのうち燃料がなくなり、ちょうど停車していたダンプカーのタンクからバケツ一杯分の燃料を分けてもらい先行の道順を聞く。そのとき二百CCのオートバイに乗ったソ連人の青年二人も話に加わり、結果的に彼らが先導してくれることになった。

何キロも走行し河の畔に出たところ向こう島らしきものが見えた。警官たちは「ここだ」と言う。だが、「そこは違う、島が二つあるところだ」と言って、またジープを走らす。先ほど燃料を融通してもらったダンプカーもついてきている。

そのうちに河辺に出て前方を見ると探し求めた二つの島が並んでおり、伐採現場は眼前に見える。だが島には行けないので、兄妹に概略を説明し線香をたいて黙禱した。そして帰途についたが、ジープが来た道に反対に進み、道はだんだん悪くなり、ついに湿地帯に迷い込み、オートバイは再三転倒する。やっとのことので広い道路に出て、夜遅くまで道案内をしてくれた若

者たちに深く感謝しながら別れる。途中またジープがオーバーヒートで暗闇で水探し、さらにオイル不足で赤ランプがつき、スタンドで仮眠していた女性を起こしたりして、ホテルに帰着したのは零時半を過ぎ、みんなは心配して待っていた。

## 私のソ連抑留記

千葉県 佐藤 勇

——敗戦から入ソまで——

もう四十八年も前の事になるので、記憶は定かではないが、もう一度思い起こして戦争の空しさ、苦しかったソ連抑留生活のこと等、私自身が体験した思い出を記しておくことも無駄ではないと思う。

思えば昭和二十年八月九日午前九時頃のことであった。私は当時満州の孫呉の周辺の荒神山という小高い丘で陣地構築作業中であった。独立工兵第一八九四部隊三中隊川本隊に所属していた。昭和十九年二月十日、

現役で入隊し、丁度一年半にあと一日という日であった。分隊長として作業指揮をしていたが、遙か孫呉の街の上空で、まるで空中戦さながらの演習が始まった。と思い、全員作業の手を休めてその光景を眺めていた。二機の飛行機の周辺で砲弾が炸裂し、白煙が飛び交うけれどもいずれにも命中せず、間もなく一機は我々の上空を、ソ満国境方面に飛び去った。実は、これがソ連空軍機による孫呉爆撃の第一陣であり、これを迎え撃つ日本機との空中戦であったと伝えられた。九日未明には、ソ連軍による満州侵攻が開始され、我が軍は黒河をはじめ、到る所で壊滅的な打撃をうけ、撤退中という情報であった。しかし、日本空軍による反撃も迎撃も二度と起こらず、一方的なソ連機の孫呉空爆が繰り返され、燃え上がる街が真っ赤になって夜空を焦がした。

戦闘命令により、直ちに臨戦体勢に入ったが、これはもうご承知のように敗戦という姿で幕を閉じることになった。私達は八月十四日頃ソ連戦車本隊への斬込み隊として二十数名選出され、爆雷を抱え乍ら出かけ